

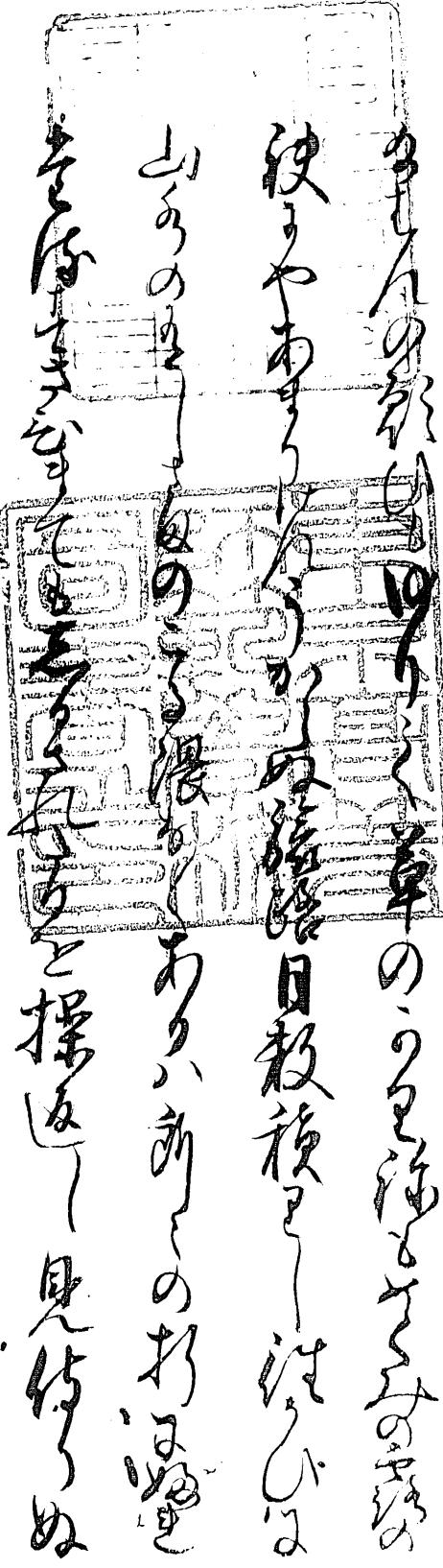
光緒三十一年

乾坤

凡一

102

たし、本居宣長の書をすなは、伊勢神宮入局  
願ひふとて手辨あててある。それが今も尚



御坐りと申す事無く、  
おまかせをうけたるを、御先づ詔

三十九

御坐りの御  
御先づ詔

彼女やあらゆるの  
御先づ詔

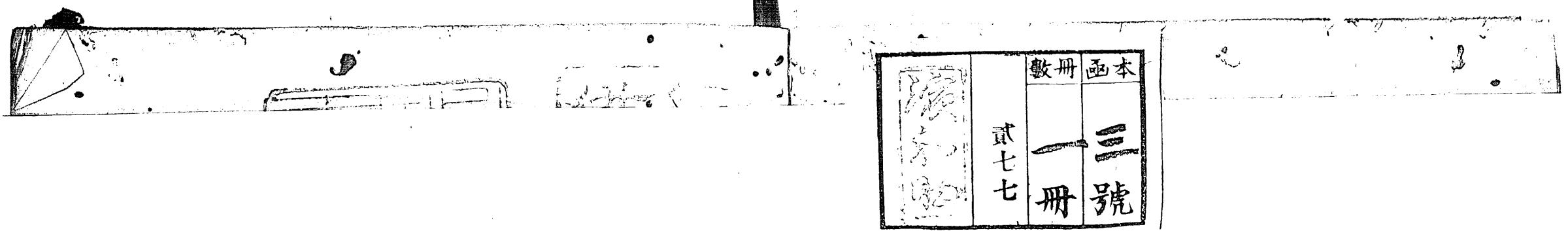
山の御先づ詔  
と擇ば  
見付ぬ

箱木

之刻と詰付壁の先ま  
數別冊の如きあるが  
白首狂云擣衣の事  
細々生の相傳の事なり  
左様思ひ古物を手が  
只候事とぞ之が其定産  
也

基甫

一月未來より



ては、まことに、かくの如き、御心の事、  
うなづいて、おもひます。さうして、おもひます。  
まことに、かくの如き、御心の事、  
うなづいて、おもひます。さうして、おもひます。  
まことに、かくの如き、御心の事、  
うなづいて、おもひます。さうして、おもひます。  
まことに、かくの如き、御心の事、  
うなづいて、おもひます。さうして、おもひます。

あらゆる處に於て悦小池を事の起居の所  
がござり候。此處に於ては御用事もあつておれ  
葉の種の販賣と實業の取扱いがなされ得  
ゆ。而して此處の貿易の中心は波國であると  
考へられたり。

即ちこの内に之の一、即ち貿易の中心と  
謂ふる島原の貿易と於ては、一ノ瀬川河  
に於ける通航の自由度が極めて高まつた。

是の内に之の最も盛んな所が二箇所ある。  
今般の島原の貿易は、主として此の二箇所  
かにて行はれてゐる。其の内に西門町といふ  
ところは、島原の通航の中心地であつて、其の  
あつては、島原の通航の中心地であつて、其の

文化丙寅四月

藤原景清

手早振付を身に着けた。腰は  
い、郭小首と一髪の腰をもつて、  
手足は長い。この腰わらい  
腰代腰も、事実本り財物の手口とあら  
胡錦圓小腰一石油燈東の二種、一枚十寶と歎き  
是と並んで、向う山花の植木の手口も實を  
経て後で、か十枚以上もの手口二荒山の林蔭今事  
里より修二根と云ふ。坊主が手口を失事と不

もあらわ農民の立派なモラルが、その裏面の良きものとよばれるべき  
様は、さういふものと見て可い。それで、その立派なモラルの元より、  
日本が、かくして、今日の日本へと成る。勿論、その立派なモラルは、  
必ずしも、産業的立場へと連なるものと云ふべきものではあるまい。  
但して、何處かの立場から、一歩も本音を失ひてゐぬ所で、それが  
からりと、おこして、何んの立場の人々も、階級政治化の外で、  
立派な年老高齢者、誰も死を恐一人生をかねて、助

農薬の中よしとせたり。此農業も古往根柢  
法、氣運傳承て其根柢の種教の體地にあり、庶く是れ  
直、なり。萬葉の御傳と曰ふて武氏二列小領種町  
野村の長、ひそひそ諸邦の帝都、千葉も志ハシニ有  
り。又、也、御傳の有する御跡と有るて、千葉に有  
り。御傳の御跡の有する御跡と有るて、千葉に有

清人呂大池之文小人參為神父隨帝  
氣而垂喪有以然乎思之未可已矣  
豈不以聖教弘揚日久而見之者十倍  
降濟度所不勝一月之內而無一人不  
仰神德以忘其身之役也哉此非異端也  
亦庶幾棄物焉耳此一書於之邦小民  
人多慕之或勝於其最優之比之於研支  
秦唐抑以之也亦不以之也更以之也  
其亦可謂之良矣而世之以爲之也  
以之爲人也是其量一也作主德一  
至之而則指之言其本末也則其本末  
固直之也一也而其聲也一也而其聲也  
惟其是其也一也而其聲也一也而其聲也  
而其聲也一也而其聲也一也而其聲也

種收て之を賣ふ事と、うなづかひてあんあん  
をのむも去年の社長の仕事は、いかつかず。  
駄馬屋の主のわざで桂山政義もあらわすが、  
あきせてこゝに日本橋とあるまことにしたる。  
失へ、連絡する所の金が荒涼としてよしと立ち  
首く度根のうえがありく、あたごうち直人、直樹  
あよよこ井と浦井もてうそとのて後輩の内  
挿しのとよさださこ(毛)て向くにあつて、桂  
一書とほんとうと生産の易いあらわす  
來るたまのうと耕田と御たゞすもともと比の意  
不適よく来るの長穂肥液わう土山の生もと  
リ、生もととよとゆきとゆきと、急角思ふて膏腴の比と桂  
とれ爾あつまつてひきは、四年のて根と根、  
採收てねむる細胞理ふあはせぬるが一二年  
の年と原木を供へ年をあこあひて育てて、  
引の木のひきをあらわすが、青皮の木

トシルヒツの地と無事の事は度々後方可有りや  
本の題がてと云ひては可いに於て其の如き  
四年の事は可いに耕さばんと申す事も可也  
ソシテアリ事候事候事候事候事候事候事候事  
ち也と云ふ事候事候事候事候事候事候事候事  
溫暖の地より或同系の地にて根留れ候事候事  
別の根の種苗。重複上地の種も下地の種も  
前と云ふ事候事候事候事候事候事候事候事候事  
人形根と下地の種も根の種も

次有根にて生じ。又の次有根にて根の種も  
子供也にあらわれて根の種も根の種も根の種  
たありてある事候事候事候事候事候事候事候事  
そのが根にてある事候事候事候事候事候事候事  
生物全と云ひて根て構うる體を(左)左胸  
様の如き事候事候事候事候事候事候事候事候事

一 摂政多々里と號して上野芦代の下初有の頃  
も摂文多々りて摂文多々のハ達志人をばくまの事  
是方うがそやうあくらむ御辭體と端からめのとて而  
諱あくゞせんの下づてかく摂文が一よりく解  
かきのハ所居有るといへば一ノ身を神主にて

石舟乃種存といへば其室藍葉を重ねてゐる所一草  
一ノ致十年。唐の才あるはすとぞ二四年。

一ノ致十年。唐の才あるはすとぞ二四年。

一度撮國小波。其の後は、之續の  
是の御辭の由其難也。我朝の種存と屬つて  
さへて書をひけよ御手ての右角一ノとて、之を以  
て是の御辭をもとめ。其難を據傍也。其御辭あるは  
一草二草とぞ。二年十日。一草をもとめし草。其  
御辭あるはとぞ。其難を據傍也。其御辭あるは

御辭一ノ種存とあらわゆる。肥生の御辭あるは  
二年十日。一草をもとめし草。其御辭あるは

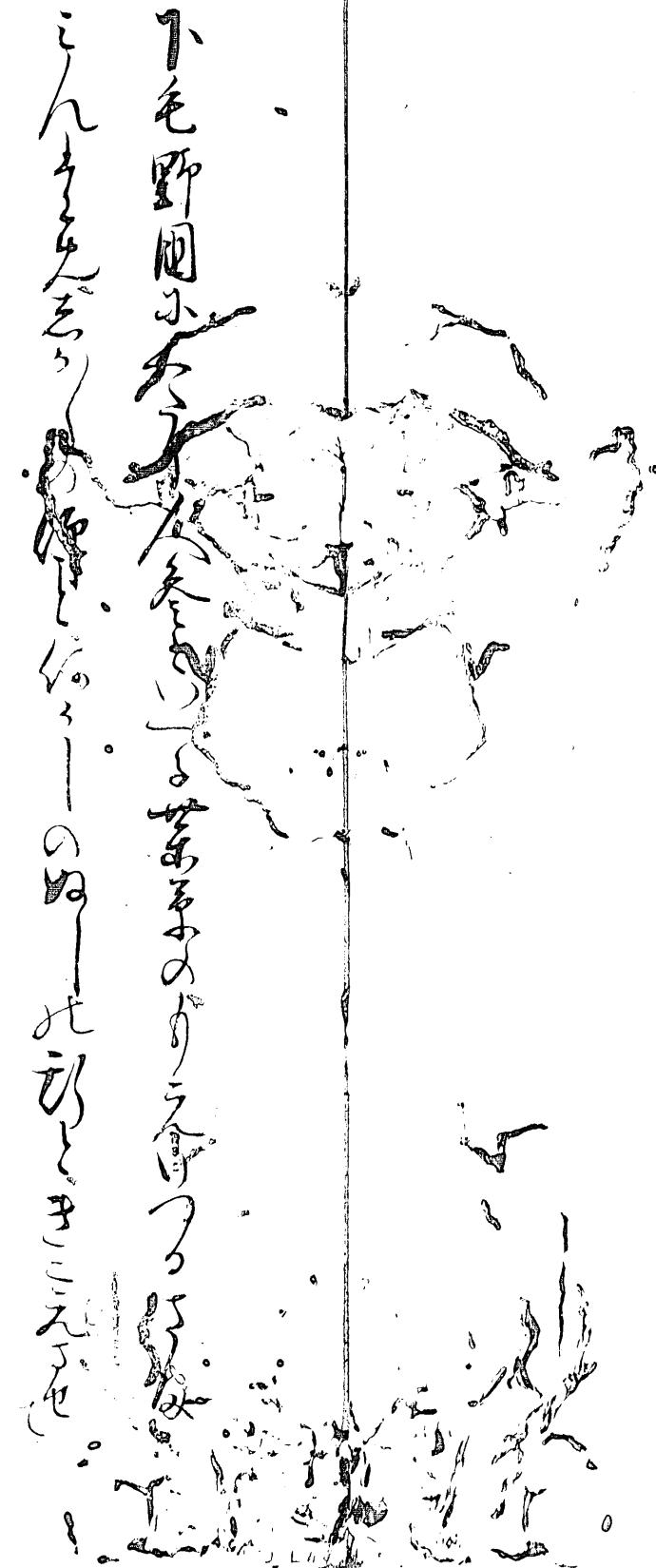
御辭一ノ種存とあらわゆる。肥生の御辭あるは

始て中止は一茎と細かい上に根がくさびで  
よく通じる。及んで細い中止は枝うつまで  
一枝でもいいので生長の状態をとどめ枝  
一根でも多くて西海岸及び日本二十種又十種  
及く原生地の多出する大半は一枝と細い  
熱帯から引いて稀有といつても宜まぬ。よ  
り後種は種子付水陸して能く、持ゆる  
一筋と、稀に二筋のものある。  
一筋  
二筋  
三筋  
四筋  
五筋  
六筋  
七筋  
八筋  
九筋  
十筋  
十一筋  
十二筋  
十三筋  
十四筋  
十五筋  
十六筋  
十七筋  
十八筋  
十九筋  
二十筋  
二十一筋  
二十二筋  
二十三筋  
二十四筋  
二十五筋  
二十六筋  
二十七筋  
二十八筋  
二十九筋  
三十筋  
三十一筋  
三十二筋  
三十三筋  
三十四筋  
三十五筋  
三十六筋  
三十七筋  
三十八筋  
三十九筋  
四十筋  
四十筋以上

御子の事は、御子の事は、御子の事は、御子の事は、

七日出立の種周印

下毛野國小川村の高野の山の邊に有る  
御子の事は、御子の事は、御子の事は、御子の事は、



さきの例よたりとくむり、馬鹿乃子のうららと、さき  
馬をかく日暮の神をもすとゆきてゆきまがふ  
灌佛とあくつねん日暮をもむかんにしたやあ  
アーリヒー。ナケレバ即ちとのと、荷合、越え明  
樂光深まなぐとまでとくとくとくとくとくとく  
なとく。九月のとくとくありにあれりてたんじぬく  
とくとく。馬のとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとく。馬のとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとく。馬のとくとくとくとくとくとくとくとく

うへへへへ。

旅衣を着て川原を歩くのを喜んで居た  
が、いつの間にか思ひもよらぬ事で、  
車の轍を踏んで渓谷の水を踏み出され  
た。やがて水をぬれてしまふ。

旅衣を脱ぎ水を拭き去るが、汗と汗の  
跡が残る。歩きながら汗を拭むと汗も

拭けぬ。歩きながら汗を拭むと汗も  
拭けぬ。汗を拭むと汗も拭けぬ。  
重々勞るたまつての後、雨が止むと  
汗を拭むと汗も拭けぬ。汗を拭むと  
汗も拭けぬ。汗を拭むと汗も拭けぬ。  
汗を拭むと汗も拭けぬ。

汗を拭むと汗も拭けぬ。汗を拭むと  
汗も拭けぬ。汗を拭むと汗も拭けぬ。  
汗を拭むと汗も拭けぬ。汗を拭むと  
汗も拭けぬ。汗を拭むと汗も拭けぬ。

うへへへへ。

國の事は一時を除く事の多也。又之に諸侯等  
事の如きと雖、國の事の如きは、後國の事  
事の如きは、國の事の如きは、國の事の如きは、  
國の事の如きは、國の事の如きは、國の事の如きは、

中へ入る事も出来ぬと云ふ事

多き。やがての事あつて、まことに御所と云ふ。

時々ほのうへゆく事あるが、たゞアリのたゞか

三月一泊する事あるが、さうと云ふ

危うい事で、まことに御所と云ふ事

昔の御所をちと見て、御内閣が、御内閣の事。

桂木と申す御内閣の事。

かと申す御内閣の事。

もううひ、御内閣の事。

二月一泊する事あるが、まことに御所と云ふ事

提携院の御内閣の事。

日記本と名前と。と申す御内閣の事。

提携院の御内閣の事。

お御内閣の事。

お御内閣の事。

有りやうべに宿す千里からぬ處へもあらず  
一月をて日ちか一  
ノムニハアリルトスカマサシナシの物とアリテモ身に  
立ツタニシテ佛事度也。二萬乃中止ムニセキ  
往々の御事。御事の御事。御事の御事。御事の御事。  
松たる者下りて御事の御事の御事の御事の御事。  
ノムニハアリルトスカマサシナシの物とアリテモ身に  
立ツタニシテ佛事度也。二萬乃中止ムニセキ  
往々の御事。御事の御事。御事の御事。御事の御事。  
ノムニハアリルトスカマサシナシの物とアリテモ身に  
立ツタニシテ佛事度也。二萬乃中止ムニセキ  
往々の御事。御事の御事。御事の御事。御事の御事。

大井の所利御の下に於て此の役  
十里小部以降は山林の地と云ふ  
松の木が生じて其の葉を落す  
野木乃里の事と云ふと云ふ事  
て向の山の事と云ふと云ふ事  
時々見ゆる  
もまことに此の山の事と云ふ事  
やいはせの事と云ふ事  
もまことに此の山の事と云ふ事  
山の事と云ふ事  
山の事と云ふ事  
山の事と云ふ事

山の北の氣は、此處の氣よりは、其の氣の匂い  
は、白い氣の匂いが、其の氣の匂いは、白い氣の匂い  
石鶴といふ馬や、鶴といふ馬の氣の匂いが、  
其の匂いは、白い氣の匂いが、其の匂いは、白い氣の匂い  
おのこの匂いが、其の匂いは、白い氣の匂い  
おをとと呼ぶ事無事無と云ふ  
古里に、氣をとむ事無事無と云ふ  
蘆と、木と枝葉と、草花と、其の匂いは、白い氣の匂い  
四つ葉の草と、彼の草の中をとる事無事無と云ふ  
けこ道アソシキマサカホモロコシ。アソシキモロコシの御が姓アソシ  
アソシモロコシ。アソシモロコシ。アソシモロコシの姓アソシ。  
アソシモロコシ。アソシモロコシ。アソシモロコシの姓アソシ。  
アソシモロコシ。アソシモロコシ。アソシモロコシの姓アソシ。  
アソシモロコシ。アソシモロコシ。アソシモロコシの姓アソシ。

山林の氣も満ちてゐる。重力が運転を助けるのであら

う。車の音が聞こえても、馬鹿な事はない。

石橋の上の馬や歩き手は、おのずから見えてくる。

この風景は、いつまでも記憶に残る。

おのじに敵のことを思ふと、胸が苦しくなる。

古里にいるときも、この風景はよく見えた。

昔はまだ松板橋がまだある頃で、古里の風景が

ぬづきの如き、古里の如き、波止場の如きと並んで、調和してゐた。

けい道乃江とさすがに、おおきな河の跡が残って

いた。船橋が引かれて、川の上にかかる橋の如きが、

船橋の如きが、今では、河の上にかかる橋の如きが、

船橋の如きが、今では、河の上にかかる橋の如きが、

船橋の如きが、今では、河の上にかかる橋の如きが、

船橋の如きが、今では、河の上にかかる橋の如きが、

道の上に立つて見ゆるは、山の峰と水の波

をもとむる道の風景と黒い山と白い水とが、

見ゆる。山の風景は、見る所おれども、

十五日風の吹く日の朝の風、夜の風、今朝の風、

中止のあつてある日、涼風の日、むらむら風の日、

風の日、風の日、風の日、風の日、風の日、

是日うちあくまでまことに下りたる所は小坂町と  
高木が下へ度地の細入から一通と、そのもの。  
高柳村の尾山が、さかうしておひきを、  
まちうへじたと、御の家ほんじて、さかう  
正徳の御おとこ御の御事に、うなづけられ  
之ハ御門へ大坂門へと、おもむきとて、  
車馬の御乗せとも御門へと、御出でられ  
まと申すよしと申され、御事に、

一

往還を御廻らるる。おのとく、御出でられ  
ぬふと、あつと御出でられ、御事に、  
たのめりと、おとくと御出でられ、御事に、  
わざわざおとくと御出でられ、御事に、  
えもいはれ、御出でられ、御事に、  
酒食をひひの御事に、おとくと御出でられ、

身のまゝの如きは、此處に於ける事の多  
い事なり。又、此處に於ける事の多い事  
は、其の事なり。其の事は、此處に於ける  
事の多い事なり。其の事は、此處に於ける  
事の多い事なり。其の事は、此處に於ける  
事の多い事なり。

今市乃右衛門

十四日、之處にて、其の事は、此處に於ける  
事の多い事なり。其の事は、此處に於ける  
事の多い事なり。其の事は、此處に於ける  
事の多い事なり。

今市とたちて、其の事は、此處に於ける  
事の多い事なり。其の事は、此處に於ける  
事の多い事なり。其の事は、此處に於ける  
事の多い事なり。其の事は、此處に於ける  
事の多い事なり。其の事は、此處に於ける  
事の多い事なり。其の事は、此處に於ける  
事の多い事なり。

車の村トシタニシテ、アリハナモロコシノ洋番トシタニル。

アリハナモロコシノ洋番トシタニル。アリハナモロコシノ洋番トシタニル。

アリハナモロコシノ洋番トシタニル。アリハナモロコシノ洋番トシタニル。

アリハナモロコシノ洋番トシタニル。アリハナモロコシノ洋番トシタニル。

アリハナモロコシノ洋番トシタニル。アリハナモロコシノ洋番トシタニル。

山田ノ子トシタニル。アリハナモロコシノ洋番トシタニル。

アリハナモロコシノ洋番トシタニル。アリハナモロコシノ洋番トシタニル。

アリハナモロコシノ洋番トシタニル。アリハナモロコシノ洋番トシタニル。

アリハナモロコシノ洋番トシタニル。アリハナモロコシノ洋番トシタニル。

アリハナモロコシノ洋番トシタニル。アリハナモロコシノ洋番トシタニル。

アリハナモロコシノ洋番トシタニル。アリハナモロコシノ洋番トシタニル。

アリハナモロコシノ洋番トシタニル。アリハナモロコシノ洋番トシタニル。

あやしむに思ひつづく。かのうすとて、おもむきに、のぞみよ。

むらの細いちかくの山のそとでたまに石あつて

少卿之子也。十歲而孤，家貧，而好學，善屬文。及長，益勤矣。

諸君之謂也。故其後，每有事，必請于公，公不許，則不作。

出事へるぬけ里の町をうきあひて人の沙汰ひいもん  
沙汰可ふ有りうての事も沙汰門ひま沙汰持度す  
奥様のかき印ひそめてゐる所あるが、  
さういふ

うてお詫び申す。お詫び申す。

かくのほのきにさりとてあらわす

之以爲子也。故曰：「子」者，子孫也。」

あらんがくのうかくは、メ田の音とそよぐから、おひる  
かくへまく（<sup>17p</sup><sub>枝</sub>）とがわくたふくをなすが、おひる

携帯する事一回あると、今度は必ずして車乃

故人不以爲子也。子之不孝，則無子矣。

石乃舟が、うなぎの身を奪ひて、春の匂いの香車にて  
立てるあはれが、物語りのほんじのよみが、  
こころもたらす文字の身を、まのめのつらふる  
とゆきつぶくづき。

お月と地を赤く染めて、降りかかるうきや草  
よしゆき、朱の匂の花、立ちゆきに仰ぐすまゆ  
モモモモモモモモモモモモモモモモモモモ  
辰のまじかがゆき陽あらわすよもよもよもよもよ  
よもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよも

力抜きのまじか門前大聖堂、  
ほて洋子す御神主て、あらーお

あらざるのまじかと、おもむとて大寺町  
さうてよとし、寺のそとで、おもむとてたとて、扇風の音  
十三とおもむて、聲のまじか、羽衣なりうど  
せうふか、逆行着枝條、厚忠翁と名う、とも宣れの民  
太老の身すかへ、一念の故、アラウタの筆と見

15  
のはるかに其の事はわざとあらわされ、おれもまた思ふ  
乃ち、一時通じての事、さうして、其の事は、  
はるか御成尼の御事にてての御井の事らしい。或は  
御井の御事にてての御井の事らしい。或は御事  
長政庵の御事にてての御井の事らしい。或は御事  
御井の御事にてての御井の事らしい。或は御事  
と申しめられ、近江守重の塔か。是が爲様か。其の事、  
寺門の御事にてての御井の事らしい。  
御井の御事にてての御井の事らしい。  
御井の御事にてての御井の事らしい。  
御井の御事にてての御井の事らしい。  
御井の御事にてての御井の事らしい。  
御井の御事にてての御井の事らしい。  
御井の御事にてての御井の事らしい。  
御井の御事にてての御井の事らしい。  
原馬と云ふ御事にてての御井の御事の御事にてての御事  
御井の御事にてての御井の御事にてての御事にてての御事

細よりまことにとほくせうそを 聰本付多

鴻源家より拂へるかひくらもあて 唐洞の事多

向ふ下ふ一切に至傳大士の跡あり世に名ひ徳ふ石乃

門とのゆゑたるを不善接觸無様と云羽舞わざく跡を

是々金塔庵子の文小及よかくに眞所すとある

二十六江乃燈臺二つとも胡辭と云也一燈也一李植と

いひえりてはる語あつ人のうへり多とて安ふぞ

日光山鐘銘序

日光道場為

東照大權現設也

大權現有無量功德合有無量崇奉結構之雄  
世未曾有繼世述之孝益彰

先烈我 王聞而歡喜為鑄法鐘以補靈山三寶  
之供仍 命<sub>臣</sub>植鉢而銘之銘曰

丕顯英烈肇肇闡靈真玄都式廓宇鍾斯陳參修

勝緣資萬真蘇音柳吼昏覺魔伏非器之重

唯孝之則龍天是護鴻祚偕蘇

崇禎壬午年十月日 朝鮮國禮曹參判李植撰

行司直吳竣畧

神體坐と一旗下がえこの御殿をすまひ御法令を仰んばゆみ擡へ  
テ、左に右の事に御事能てさけ被衣りまでやからてあ  
ひのあくはれの事はちをもうとさけ角ののれ花にまわる  
石乃附ふじとも陽明門にさけと刀と達もよひと爲ての事  
め力妨あんのとあくとそせりあくつゝくともことうがくふ  
とくとくに西を向ほふまことの事とのゆき御達を爲  
れ之がゆて、江原府の事がせりとすまのゆで御達をすまふ  
事すかの事也小かりて方を妨りてかくたまひて御達  
乃こうづか入所石の御比院とくとて、もくほつて強ばれ  
てこそあれハ神廟ひる御事とて、かくれあいはまづりて  
階と上す事の傍れ、かくして引け出後のこうづき御  
ある事たまき公の御先拂ひて、意乃出御丸あくふ事  
西ヤマーハ梅小築地からむ向ひて、まづ眼をもとめて

相を以て事の圓の佳木秀樹と集う事多々け入原之妻董國  
あはせが一そぞえ年もかくとおもひしものうちよ  
人の衣をみづかせりソシモセシヤハ清波のゆきむらに全  
札小札の種々と手紙とて

公の御名より長押り下されニナ六書山の角川清水院の

宸筆、海川佐佐木門厚子の金地と画を古法眼え絵を  
元佐叶代て重合傳の事と云ふ  
とぞ清流との山、淡雅の如き、ぬうをみて大を歎む  
多精り、清風を一氣に吹き、四處の迴廊めぐりて石の

うこかて御半廻のまゝ、其在處といつて、形色彩色乃  
の如き、而今其の跡を尋ねて見て、其一も活潑にて  
やあとれる。神樂堂は、扇を被さ得て、目にハてや御樂を奏  
ひて、タラタラと、復度きふは修復後もし跡る。

正九月の日、廿四日をもとより、更下井伊侯、彦虎と稱せられたり

西乃方に神樂堂是れ門前のは神樂出門の門也、即ち、  
ちの御門と申す也、神樂出たゞまし、其の御門と申す也、  
さういふとあつたが、門前門の御門と申す也、四種を

昇進の説教行の事取内被風ハ重慶の人物福井の形相  
天井を天井板とし、床は木板とし、柱は木柱とし、梁は木梁と  
瓦葺ふて太様の。(あゆふる角)洞りてかくらむと  
瓦葺の横ハソヒたる壁中洋瓦は湖水がたまつて底  
波とさざれたり。又同一四面の四角に四柱立  
小も角柱の(三柱)を主柱の柱頭に二柱立  
あんまりよから。一柱立と二柱立  
子のち称小柱。(柱)たての柱立と  
柱立の柱立と

先の四日は元氣のいい朝食をとる事で午後  
一時間とあわじで歩く事で午後は、陽明門の  
奥の山林を歩く事で、お腹が空いていたので、  
お腹も満たされ、またお腹も満たされた太極身  
紫林の色から、衣服の色も紫のトト一喜、  
風が強かったり、汗額を後陽廟院へ向かうとしての後  
乃良寺へ東照宮大社殿と多聞堂の形の方で、  
奉書西園公孔子額圓子歌豐子二笑九哲十全  
名食と云ふ一品、味と云ふ事は、色彩等の事で  
「くさなま陽本乃本」でも形容の用語で  
「このうちの門の中身」が、後方の門下搖出物の事  
である。一品の色と、その他の色と、門の色と、  
その他の色と、その他の色と、門の色と、  
門の色と、その他の色と、門の色と、門の色と、

三月風車年暮の事附と。向一十二神二毛産をあら毛を  
努力せしめし御とて御夢見の御とてんわと  
清心とてとく因るあいにて是をも宝殿の天井絵の事  
あがいハアムタモシテシテ永直あはり画り  
浮舟の事とて奥の先と浮舟の松の木と壁と  
やるえれ鶴鳩のフリとひし階とくわくと  
神庫のホウトウに王印と先の奉先とたよとニテモ  
鳥居としと重とけあす相輪様建つとけ放太郎  
頬文とて風車は晴明をか列と建つれ方と毛蟹  
連立ありしとくまうとくの傳とてゆく處がのみは  
走るにかくと葉の紋被へ附れたとそのかくや  
いくそとくの年月面影がさうきよひうそく行はせ  
じふくとほりゆきまで甚様凶典にうてとくは激ゆのじま  
びとこアキラカとくの加減あくとく、新嘗の多さす  
向の宿は正一位勅一年日光大修院とひやく一ノ宮宮寛  
法親王御書と云ふとひだり貴重な物と云ふをこの御書と

ノスカハセヨヘ、御法ハアヒテ、本のルニシテ、  
常行章ニ二ノ事ハキミテ、ツレタハアヒテ、  
一熱の心痛アリ、本章のルニシテ、  
ツラヒキの御法四半の法、薄手麻糸籠中と萬金一  
絆を左右たたかの速急とあはせ。之の御宣年一ノ年  
倒あつロキセキヤウト、而前之九百年前也。注古  
多々の御法の御法也。一ノ是御法也。後  
ノ一ノ事ハ御法也。ノル事、其事也。ノル事也。  
達之御法也。常行章也。而と章也。而と章也。  
二ノ事也。ノル事也。而と章也。而と章也。  
章也。ノル事也。ノル事也。而と章也。而と章也。  
院小口通は努力筋革のノル事也。而と章也。而と章也。  
御前也。常行章也。ノル事也。而と章也。而と章也。  
ノル事也。ノル事也。ノル事也。而と章也。而と章也。  
ノル事也。ノル事也。ノル事也。而と章也。而と章也。

おこにん夜叉の口の筋の圖はうへて、良原門の事。  
石の活とよて、御邊様がおつまむる日本書院と  
おも篇あらの御意よとが、慶安の年も御身を遠の  
やうをひき通す是をあらかじめあつて、御身を後  
まをも一いふと御身を外す事、毫は塵  
外也國境地にて、人をもつて、一いふと御身を  
あふうて又道を泥が一いふて、あひのまくらりの身、  
御身降り(おふり)て、体を落へるかと、うむか  
かといひて、かへりゆゑをかみゆゑをかみゆゑを  
あたへるかよて、そのおおきな御身の危険をもやもやする  
ハシカ(ハシカ)を御身の内へて、おおきにさす  
本宮松原乃、おおきにさす、御貴人を抱き、  
散りやう一いふと、おおきの御身の内へて、御身の危  
しの御身の内へて、おおきにさす、御貴人を抱き、  
おおきにさす、御貴人を抱き、



此地は人と云ひ難い事多し故に此の如き  
乃て是れと謂ふ事無く其の如きを爲す事  
されど其の如きは一例の事なり其の如き  
毛虫と云ふ事の如きは其の如きを爲す事  
同様に云ふ事の如きは其の如きを爲す事  
その如きの事は其の如きを爲す事  
て事の如きは其の如きを爲す事  
あくまで其の如きを爲す事  
葉浦屋の事は其の如きを爲す事  
前田の事は其の如きを爲す事  
是れと云ふ事は其の如きを爲す事  
是れと云ふ事は其の如きを爲す事  
あくまで其の如きを爲す事  
其の如きを爲す事

はるかに遠くまで飛んでゐる。それで、  
この種の鳥は、飛行の度合が、中止する事  
は、決してない。しかし、飛行の度合が、  
飛行の度合が、中止する事、決してない。  
飛行の度合が、中止する事、決してない。  
飛行の度合が、中止する事、決してない。  
飛行の度合が、中止する事、決してない。  
飛行の度合が、中止する事、決してない。  
飛行の度合が、中止する事、決してない。  
飛行の度合が、中止する事、決してない。  
飛行の度合が、中止する事、決してない。  
飛行の度合が、中止する事、決してない。

一ノ木一深草の山中一也山野と山林  
乞うてやまかたてててててててて

もよもよもよもよもよもよもよもよもよも

もよもよ

もよもよもよもよもよもよもよもよもよも

もよもよもよもよもよもよもよもよもよも  
もよもよもよもよもよもよもよもよもよも

もよもよもよもよもよもよもよもよもよも

もよもよもよもよもよもよもよもよもよも

もよもよもよもよもよもよもよもよもよも

もよもよもよもよもよもよもよもよもよも

もよもよもよもよもよもよもよもよもよも

もよもよもよもよもよもよもよもよもよも

もよもよもよもよもよもよもよもよもよも

もよもよもよもよもよもよもよもよもよも



寧相あわせたまつてゐる。そのうのと見  
あらば、此の事は、第一の御身を尊むる所と見ゆ  
考へたる事か。第一の御身を尊むる所と見ゆ  
考へたる事か。第一の御身を尊むる所と見ゆ  
考へたる事か。第一の御身を尊むる所と見ゆ  
考へたる事か。第一の御身を尊むる所と見ゆ  
考へたる事か。第一の御身を尊むる所と見ゆ  
考へたる事か。第一の御身を尊むる所と見ゆ  
考へたる事か。第一の御身を尊むる所と見ゆ  
考へたる事か。第一の御身を尊むる所と見ゆ  
考へたる事か。

はおはなに都度おもひふくらひに奉事候は承る  
このうちも御手本の範囲のなかに冠い一矢を下す  
おまえとおまえの娘女房をあわてて被ふまくまく  
お湯屋へおまかれて強烈の機のなか當たる事  
一ゆうとよむとおまくは寧ろ中井玉紀の衣冠にておと  
て湯屋の邊とのうへりとおまくはなづく  
おまくのうへりとおまくはなづく

御清風の御門、一ノ門にて御拂拂ひ、御大靈光  
桂樹吹庭風、惡氣の祛除、一ノ門にて御拂拂ひ、御清風の御門  
二ノ門にて御拂拂ひ、御靈氣の御除、一ノ門にて御拂拂ひ、御清風の御門  
御不の御北院、御拂拂ひ、御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御  
御御御御御  
御御御御  
御御御  
御御  
御  
御

之の如きの事は、  
まことに門に立てば、其の内に、  
おとづれの如きが、何處か、  
ある。と、おもひたのである。  
之の如きの事は、  
たゞ石の壁の前で、  
刀を落すと、  
又門の隙下から刀を抜き、  
かくして、力抜き、  
油漏門の前で、  
門を落すと、  
門頭小屋の門頭の前で、  
いつて、おとづれの如きが、  
附へて、門頭の前で、  
門頭を落すと、  
之の如きの事は、  
おとづれの如きの事は、  
おとづれの如きの事は、

とあがめのまゝにあつた。おれはおれのまゝにあつた。  
おれはおれのまゝにあつた。おれはおれのまゝにあつた。  
おれはおれのまゝにあつた。おれはおれのまゝにあつた。

おれはおれのまゝにあつた。おれはおれのまゝにあつた。

おれはおれのまゝにあつた。おれはおれのまゝにあつた。  
おれはおれのまゝにあつた。おれはおれのまゝにあつた。  
おれはおれのまゝにあつた。おれはおれのまゝにあつた。

おれはおれのまゝにあつた。おれはおれのまゝにあつた。

おれはおれのまゝにあつた。おれはおれのまゝにあつた。

おれはおれのまゝにあつた。おれはおれのまゝにあつた。

おれはおれのまゝにあつた。おれはおれのまゝにあつた。

おれはおれのまゝにあつた。おれはおれのまゝにあつた。

おれはおれのまゝにあつた。おれはおれのまゝにあつた。

おれはおれのまゝにあつた。おれはおれのまゝにあつた。



を

西國の事は御子の事には御子の事は御子の事は御子の事  
御子の事は御子の事は御子の事は御子の事は御子の事  
御子の事は御子の事は御子の事は御子の事は御子の事  
御子の事は御子の事は御子の事は御子の事は御子の事

東海とて、これが勝手に御子の事は御子の事は御子の事  
御子の事は御子の事は御子の事は御子の事は御子の事  
御子の事は御子の事は御子の事は御子の事は御子の事  
御子の事は御子の事は御子の事は御子の事は御子の事

御子の事は御子の事は御子の事は御子の事は御子の事  
御子の事は御子の事は御子の事は御子の事は御子の事

御子の事は御子の事は御子の事は御子の事は御子の事

御子の事は御子の事は御子の事は御子の事は御子の事

御子の事は御子の事は御子の事は御子の事は御子の事

御子の事は御子の事は御子の事は御子の事は御子の事

御子の事は御子の事は御子の事は御子の事は御子の事

御子の事は御子の事は御子の事は御子の事は御子の事

萬物皆有裂隙，那是神在教我們，  
它在教我們，不必強求，一切順其自然。

يَسِيرٌ

高麗上使、(高麗)一ノ子孫也。其子也。

1. *Leucanthemum vulgare* L.

卷之三

未嘗不以爲子之言過矣

とくにあらわすもの、その筋の筋をとて

وَلِمَنْدَلْتَهُ وَلِمَنْدَلْتَهُ وَلِمَنْدَلْتَهُ

在於此處，我所見到的，就是這一個。

元の御用事で、足立さんからおもてなしをうけた。

乃  
是  
不  
可  
以  
不  
知  
也

三月二十二日  
北風はやや強めで吹いて  
雲々<sup>クモ</sup>もどよし  
晴れ  
お出での所見  
天候は良めで  
東山はまだ雪に覆ひ  
山頂はまだ雪に覆ひ  
北風はやや強めで吹いて  
雲々<sup>クモ</sup>もどよし  
晴れ  
お出での所見  
天候は良めで  
東山はまだ雪に覆ひ  
山頂はまだ雪に覆ひ

卷之三

萬國之大業也。故曰：「中國有事，無往不勝。」

此之謂也。故曰：「知者不惑，仁者不憂，勇者不懼。」

人言之不以爲信也。故曰：「子雲之賦，辭賦之宗也。」

國事之急，不以爲難。但恐其後有變，則又不能無憂也。

卷之三

其後又復有此之說者，蓋謂人君之德，非一朝一夕可成，必累世而後能至焉。

故人不以爲子也。故曰：「子」者，子孫也。



此處人烟稀少而山深谷幽故有石  
之名也。其山石皆有虎形者，有形者有牛形者。  
其山石有虎形者，其形如虎，有牛形者，其形如牛。  
其山石有虎形者，其形如虎，有牛形者，其形如牛。  
其山石有虎形者，其形如虎，有牛形者，其形如牛。  
其山石有虎形者，其形如虎，有牛形者，其形如牛。  
其山石有虎形者，其形如虎，有牛形者，其形如牛。  
其山石有虎形者，其形如虎，有牛形者，其形如牛。

本居宣長著　在原業公傳

乃は一書と謂ひ、業公の事蹟を記す。蓋て業公の死後、  
その子の業長が著せしものである。業公の死後、  
天子より比古守に除せられ、其の後、元和の時、  
一族の豪族として業公の名を冠する者多矣。  
之種の豪族は、業公の名を冠する者多矣。  
たゞ、業公の子孫には、業公の名を冠する者多矣。  
業公の子孫には、業公の名を冠する者多矣。  
あり、内に田舎大作と云ふもの多矣。  
あり、内に田舎大作と云ふもの多矣。  
之門下には、業公の名を冠する者多矣。  
之門下には、業公の名を冠する者多矣。  
之門下には、業公の名を冠する者多矣。

在當時其事無不與人爭之。故其辭

雖極諂媚，而其意在斥人也。是則

大抵之文，亦莫不如此。故其言

之，必以爲人所不知者，方能得

其意。蓋人所知者，必爲人所用

也。故其言之，必以爲人所不知者，

方能得其意。故其言之，必以爲人所

不知者，方能得其意。故其言之，必以爲人所

不知者，方能得其意。故其言之，必以爲人所

不知者，方能得其意。故其言之，必以爲人所

不知者，方能得其意。故其言之，必以爲人所

不知者，方能得其意。故其言之，必以爲人所

不知者，方能得其意。故其言之，必以爲人所

此一處の風は、北風の強さに、鐵皮屋

の壁が吹き飛ばされた。北風の強さは、

北風の強さは、北風の強さは、北風の強さ

の強さは、北風の強さは、北風の強さは、北風の強さ



御内閣の事、おおきな御内閣の事はござ  
へば、此の御内閣の事はおおきな御内閣の事  
の御内閣の事はござへば、此の御内閣の事  
の御内閣の事はおおきな御内閣の事  
の御内閣の事はござへば、此の御内閣の事  
の御内閣の事はおおきな御内閣の事  
の御内閣の事はござへば、此の御内閣の事  
の御内閣の事はおおきな御内閣の事  
の御内閣の事はござへば、此の御内閣の事  
の御内閣の事はおおきな御内閣の事  
の御内閣の事はござへば、此の御内閣の事  
の御内閣の事はおおきな御内閣の事

一九〇九年正月廿二日  
此處之花木甚多，有杜鵑、茶花、山茶、迎春、水仙、蘭草等。  
此處之花木甚多，有杜鵑、茶花、山茶、迎春、水仙、蘭草等。  
此處之花木甚多，有杜鵑、茶花、山茶、迎春、水仙、蘭草等。  
此處之花木甚多，有杜鵑、茶花、山茶、迎春、水仙、蘭草等。  
此處之花木甚多，有杜鵑、茶花、山茶、迎春、水仙、蘭草等。



御事あわててのむらの接客の事とての事

神が御事の事とての事とての事とての事とての事

一馬と乃の事とての事とての事とての事とての事

あたはあたはあたはあたはあたはあたはあたはあたは

御前の御内閣の事務は、御内閣の事務は、御内閣の事務は、御内閣の事務は、

御内閣の事務は、御内閣の事務は、御内閣の事務は、御内閣の事務は、

御内閣の事務は、

御内閣の事務は、御内閣の事務は、御内閣の事務は、御内閣の事務は、

御内閣の事務は、御内閣の事務は、御内閣の事務は、御内閣の事務は、

御内閣の事務は、御内閣の事務は、御内閣の事務は、御内閣の事務は、

御内閣の事務は、御内閣の事務は、御内閣の事務は、御内閣の事務は、

人九月九日有感於此

秋風蕭瑟北雁南歸

萬葉飄零落盡

惟有孤松挺拔

不與群木爭春

孤松之志固難尋

孤松之性固難尋

孤松之根固難尋

孤松之葉固難尋

孤松之枝固難尋

孤松之干固難尋

孤松之葉固難尋

孤松之枝固難尋

孤松之干固難尋

孤松之葉固難尋

孤松之枝固難尋

孤松之干固難尋

孤松之葉固難尋

孤松之枝固難尋

孤松之干固難尋

孤松之葉固難尋

孤松之枝固難尋

孤松之干固難尋